

をみなへし・あさがほ、そして紫式部のあさがほ

Ominaeshi, Asagao, and Murasaki Shikibu's Asagao

宋 貴 英*

Heroes and heroines in the stories of the Heian era represent the people at that time and their way of living. For example, just as we can find in stories, people at that time used “kakekotoba” (pun), “engo” (associated words), and “hikiuta” (quoted poems) in their conversation, and so do the characters in “The Tale of Genji”.

In “The Tale of Genji”, there is no end to quoted poems. Employing such quotations of poem makes it possible to introduce the atmosphere of the poems and their implications into the novel, and to add some depth which otherwise could never be achieved. It helps to express the feelings in the story in full, and thus, its function is indispensable.

“Kago” or words from poems of “Kokin-wakashu” and others penetrate into “The Tale of Genji”, and their roles in its literary expression have been discussed considerably. In this presentation, I examine the word “asagao” in “The Tale of Genji”, which never appears in “Kokin-wakashu” or any other anthology compiled by Imperial command. I attempt to consider the meaning and the literary value of the word

* SONG Kwi-Young 中央大学大学院博士課程

“asagao” in “The Tale of Genji” in comparison with equivalent expressions in works before that. In a sense, this may be closely related to “mononoaware”.

はじめに

『枕草子』の「宮にはじめて参りたるころ」の段の中で、伊周（皇后定子の兄、当時大納言）が訪ねてくるところを、『拾遺和歌集』の、「山里は雪ふりつみて道もなし今日来む人をあはれとは見む」という歌を踏まえて、「こんなに雪が降っているので、『道もなし』とっておりましたのに」と定子が言うと、伊周は、「『あはれ』とお思い下さるか、やって来ました」と、応酬する。そのありさまを見て清少納言は、「物語にいみじう口にまかせて言ひたるにたがはざめりと覚ゆ」、つまり、「まあ、物語の世界にやってきたようだわ」と感嘆するのである。

物語の中の主人公たちは、掛け言葉、縁語、引歌で受け答えし、そういう会話を日常生活で交わしている。それが当時の上流社会であり、そして『源氏物語』の中にもそういう世界がそっくりそのまま表われていることは言うまでもない。

『源氏物語』の中の引歌については、伊井春樹氏^①が、古注釈以来指摘されている引歌を、四千首以上もあげておられ、また、秋山虔氏^②は、『源氏物語』中の引歌は何首ぐらいか数えられない、と述べられた。そのことは、『源氏物語』の中にどれだけ言葉の重層的な表現が多く使われているかを知らせてくれる。つまり、引歌を思わせることばを用いることによって、その文章の表現に、歌の世界を導入したり、複雑な奥行きを持たせているのである。それだけに、そういう表現は、物語の中を流れる感情がもっとも充実し、しかも過不足ない要素として魅力を発揮している。

また、『源氏物語』の文章に、『古今和歌集』以来の歌語の浸透と、その表現効果を指摘なさった鈴木一雄氏^③は、歌語の表現価値は、「もののあはれ」

論の力源であるかも知れないと言っておられる。それは石田穰一氏^④の『源氏物語』における歌語の認定、特に表現価値の問題は多いとされているのとも通じるところがあって興味深い。

さらに石田氏は、『源氏物語』における歌語の問題は、作中歌や引歌表現とも深く関わり、文体論や表現論掘り下げの一角を負い、さらには作品論や作者の和歌観とも響き合うと、指摘しておられる。^⑤

このような諸説をもとにして、私はここで、『源氏物語』の中で意味深長な言葉として、また奥行きを持つ言葉として使われているように思われる「あさがほ」ということばについて考えてみたい。しかし、このことばは『古今和歌集』はもちろん、他の勅撰集にさえもその例が見えない、とにかく歌に詠まれた例が極くわずかである。その上、その少ない例の中に、『源氏物語』の中でのそのような、奥行きを持つ重層的なイメージを与えるものはまだないのである。

さて、「あさがほ」のことを考えるならば、実際、朝顔の花はどんな花なのかも一緒に考える必要があろう。それは、ことばのイメージはやはり実際の花のイメージをもとに生まれるものと思うからである。そこで、「あさがほ」は本来どういう花であり、またそれがどう詠まれて来たか、そしてどういう意味を含んでいるかを、『源氏物語』以前の作品の中の例も一緒に挙げながら順次に考えていこうと思う。

(1) あさがほの花

古来朝顔については、(1)桔梗説(新撰字鏡)、(2)木槿説(古義品物解、品類抄・類聚名物考)(3)旋花説(和名類聚抄)、(4)牽牛子説(比古婆衣)、(5)以上のすべてを総称した名とする説、(6)そして、あさがほの語源について、朝のかほばな容花の意とする『大言海』のような諸説がある。

しかし、(6)の例だけは、『万葉集』の中でも、「あさがほ」と「かほばな」は、例えば、

高門^{たかまと}の野辺のかほ花面影に見えつつ妹は忘れかねつも (1630)

のように、「あさがほ」と区別して使っているようである。これについて、『万葉集大成』^⑥の「民俗篇」に次のような説明がある。

この貌花古來說があつて、燕子花^{かまづばな}、澤瀉^{おもだか}、槿、牽牛花、旋花説がなされてゐるが、旋花が定説となつてゐる。その根據は、①旋花が今ヒルガホと呼ばれる如く貌花として代表される美しい野の花であること。②旋花に備後地方の方言にカツポウの呼名がある。これはカホを訛れるもので、古名の残つてゐる證である。槿花、牽牛花は共に外來植物で野生がない。澤瀉はカホと云はれる程美しい花ではなく野に野生がない。燕子花も亦水邊の草で野に野生がない。これらの理由で旋花に當てるもので、萬葉の歌に旋花を當てて少しも不自然さが無い。

また『万葉集』には「あさがほ」のことばが別に七例見えるが、これについても同じ『万葉集大成』「民俗篇」に説明があるので挙げてみることにする。

今あさがほというのは、牽牛子のことであるが、牽牛子は延喜式卷三十七典藥寮に、牽牛子^{けんごし}と初めて見え、古今にも「けにごし」と詠まれ、萬葉時代には存在しない植物である。従つて、萬葉のあさがほにこれを當てるのは不可で、このことから、このあさがほは、朝に咲く美しい花をなべていふといひ、或は木槿説^{むくげ}、桔梗説、旋花説、牽牛花説が從來唱へられてゐるが、木槿、牽牛花は萬葉以後の外來植物で野生なく、旋花はその花期夏で、また七種に數へらるべき品位もない所から、桔梗説が定説となつてゐる。

さて、ここで、両方とも木槿、牽牛花、旋花が候補にあがつているのはどういうことであろうか。「かほばな」も、「あさがほ」も、具体的な植物名でないため、これは可能性として絶対にあり得ないことは言えないにしても、その中の旋花についての説明にははなはだ疑問が起る。一方では、「貌花として代表される美しい野の花」といい、そしてもう一方では、「七種に數へら

るべき品位もない」となっている。もちろん「かほばな」には他に、燕子花や澤瀉もあがっている点など、考慮の余地はあるが、ここではまず「あさがほ」との関連事項だけに絞って考えていくことにしよう。

まず(1)の桔梗説についてであるが、『万葉集大成』の「民俗篇」に以下のよう
に述べられている。

『新撰字鏡』に、「桔梗 阿佐加保 又云岡止々支」とあることから、
『万葉集』に見える「あさがほ」は、花期、七種の取合せが集中の他の朝
貌の歌と合致している。在来の野の花で美しく、朝貌の名にふさわしい。
つまり、『万葉集』においての「あさがほ」は桔梗説をよしとしているので
ある。

一方、木槿、牽牛子、旋花については、『箋注倭名類聚抄』の「牽牛子」の
項で詳しい説明をみることが出来る。これによると、最初に、①「牽牛子」
についての説明があつて、そのあとに、②「木槿」や「旋花」を^{あさがほ}舜と呼ぶよ
うになったいわれが付け加えられている。

まず、①の牽牛子についてであるが、内容を分りやすく注ごとに表にして
みると次のようになる。

表1

	陶注	蘇注	蜀本図経
花	○ 蘊豆に似る ○ 黄色	○ 旋菖花に似る ○ 碧色	○ 碧色 (+ 紅い) ○ 鼓子花(旋菖花)に似る 大きい花
子	○ 小房の形 ○ 球	○ 黄色 ○ 殻があり小房を作る	○ 蕎麥と同じく三つの 稜がある ○ 黒色、毬のようなもの が四、五
実	○ 黒 ○ 核	○ 黒	○ 8月に外側に白いもの ○ 皮があつて毬のような裏を作る
葉			○ 青い三つの尖角

その他	○藤を作る	○條に実がついている	○苗の時蔓が出る
		○蔓から葉を取る	○2月に子を蒔く
		○稲や蕎麥と同じ類	○3月に苗が出、藤を作る (高いのが2、3本だけ) ○7月に花咲く

この内容を見ると、蘇注と蜀本図經の記述は似ており、いずれも蔓草の一種であることを示している。これだけで牽牛子が現在のあさがほとはいえないが、蔓を巻き、夏花が咲くという点は、いまのあさがほを思わせるに充分値する。

しかし、問題は、昔「あさがほ」と呼ばれた花は、牽牛子だけではなくたということである。次の②木槿や旋花を^{あさがほ}舜と呼ぶようになったいわれのところを見てもわかる。同じく『箋注倭名類聚抄』から一部抜粋しておこう。

旋花本名舜見説文俗從艸作舜以別堯舜字木槿一名舜亦見説文或假舜偽舜毛詩顔如舜華傳舜木槿也是也然則旋花之舜或可作舜木槿之舜或可作舜而木槿亦朝華暮落者則謂木槿偽朝貌者蓋因舜舜通作興朝花暮落

つまり、木槿と旋花それぞれの別名である舜と舜の字には「瞬」の意味も重ねて考えられることもあって、そのまま和訓にした「あさがほ」になったということである。

ここで、木槿と関連するものとして、もう一つの例をあげておこう。『韻府群玉』(1310)の木槿の説明である。

槿に黄白あり。一名日及と云。字書に槿は舜也。毛詩和訓に。呼舜日朝顔、是りよりて日本の俗。槿舜共に牽牛花とす。大なる誤也。宋人詩云。槿花、籬下占秋事、早、有、牽牛上、竹来、此詩の心。槿舜と牽牛と各別也。牽牛花はかたち扁豆のごとし。田野人の牽牛葉にかゆれば此名を得たり。古詩云。君子、芳槿、性春濃、秋更繁、小人槿花、心朝、有、夕、不存、しかるを歌には此分別なく題に槿

花をまがきにかかるなど詠ぜり。同名なればあやまるなり。

ここで、「槿^{きん}共^{とも}に牽牛子^{けんぎうし}とす。大なる誤也。」とあるのは、当時すでに牽牛子が、「あさがほ」として通用していたことの現われではなかろうか。

では、実際、日本の文学の世界では、「あさがほ」はどんな花で、またどんなイメージを持つかを考えてみたい。

(2) 「あさがほ」と「をみなへし」

以上、見て来たように、「あさがほ」には、それぞれの裏付けを持つ異説が存在する。そこで、今回の研究では、作品中に登場する「あさがほ」がどの説に当るかを軽く探るとともに、作品の中でどういうイメージを持ち、またどのぐらい重層的、かつ奥行き深いことばとなっているのかを考えていきたいと思う。

まず、私は、『源氏物語』の中の次のような場面に着目した。

……出てたまふままに、下りて花の中にまじりたまへるさま、ことさらに艶^{あざ}だち色めきてももてなしたまはねど、あやしく、ただうち見るになまめかしく恥づかしげに、いみじく気色だつ色好みどもになずらふべくもあらず、おのづからをかしくぞ見えたまひける。朝顔をひき寄せたまへる、露いたくこぼる。

「けさのまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見るはかな」と独りごちて、折りて持^もたまへり。女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひゐる。
(5)「宿木」380^⑦)

ここの「女郎花」を、注釈書の中では多く、「女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば」(『古今和歌集』四、秋上、布留今道)を引くか、または、「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時」(『古今和歌集』十九、雑躰、僧正遍昭)を引歌にしていると考えられている。これらの歌をみると、「女郎花」とは「をんな」を意味しており、特に和歌の世界では、美人・佳人に見たてて詠むことが多い。この場面では、そのような

意味を持った「をみなへし」という言葉を、物語中に用いることによって、従来からある印象やイメージを与えているのである。その点で、これは歌語表現をうまく使った良い例といえるであろう。

一方、「朝顔」は今までない、「はかない」、「無常」という新しいイメージをもつことばとして捉えられている。

考え方によっては、この「をみなへし」と「あさがほ」は、第3部の恋物語ではキーワードであるとも言えよう。そしてこの二つのことばを、いっしょに使うことによって、重層的なイメージを一層深めていると思われる。

しかし、それがいっしょに使われたとしてもイメージとしては全然違う場合がある。例えば、『紫式部日記』に次のような部分がある。

渡殿の戸ぐちの局に見いだせば、ほのうち霧りたる朝の露もまだ
落ちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水はらはせ給ふ。橋
の南なる女郎花のいみじうさかりなるを、一枝折らせ給ひて、几帳
のかみよりさしのぞかせ給へり。御さまのいとはづかしげなるに、
わが朝顔の思ひしらるれば、「これおそくてはわろからむ」とのたま
はすることつけて、硯のもとによりぬ。

女郎花さかりの花を見るからに露のわきける身こそしらるれ
「あな疾」とほほゑみて、硯召しいづ。

白露はわきてもおかし女郎花心からにや色のそむらむ

（〔三〕朝露の女郎花^⑧）

ここでの「をみなへし」は「盛りの女」というイメージを重ねていると言えるが、「朝顔」は、「朝起きたままの顔」ということで、「はかない」とか「無常」といったイメージはない。

それは、「をみなへし」が、『源氏物語』以前の文学作品の中で多く詠まれ、すでに「盛りの女」、「自ら積極的に愛を求める女」というイメージとしてあるのに対し、「あさがほ」は詠まれた例が非常に少なく、その上『源氏物語』以前の文学の中では「はかない」というイメージは全くないことによるであ

ろう。特に『古今和歌集』をはじめ、勅撰集の中にその例が一つも見えないことは注目すべきである。

では、次に、『源氏物語』以前「をみなへし」と「あさがほ」はどう詠まれていたかを見てみることにする。

(3) をみなへし

A. 『源氏物語』以前の作品の中で、

まず、「をみなへし」について、『源氏物語』以前の作品の中での例と、そこから受けるイメージはどんなものであるかを考えることにしよう。

a. 万葉集

『万葉集』^⑨の中には約166種の植物が登場しているが、その中で「をみなへし」を詠む歌は次のとおりである。

- (675) をみなへし佐紀沢に生ふる花がつみ
かつても知らぬ恋もあるかも
- × (1346) をみなへし佐紀沢の辺のまた葛原^{くずはら}
いつかも繰りて我が衣に着む
- × (1534) 女郎花秋萩手折れ玉梓^{たまほこ}の
道行裏と乞はむ兒がため
- (1537) 山上臣憶良の秋の野の花を詠む
秋の野に咲きたる花を指折り
かき數ふれば七種の花
- × (1538) 萩の花尾花葛花嬰麥の花
女郎花また藤袴朝顔の花
- (1905) 女郎花咲く野に生ふる白らつつじ^お
知らぬこと以^もち言はえしわが背
- △ (2115) 手に取れば袖さへにほふ女郎花
この白露に散らまく惜しも

○ (2279) わが郷きとに今咲く花の女郎花

堪へぬ情こころになほ戀ひにけり

△ (3943) 秋の田の穂むき向見がてりわが背子が

ふさ手折りける女郎花かも

○ (3944) 女郎花咲きたる野邊を行きめぐり

君を思てひ出たもとほり来ぬ

△ (3951) 晩蟬の鳴きぬる時は女郎花

咲きたる野邊を行きつつ見べし

以上の『万葉集』の中の「をみなへし」を、そのイメージから分けてみると、植物の「をみなへし」のイメージだけのもの「×」が三首、「女」のイメージを持つもの「○」が四首、そしてまだ何とも言えない段階のもの「△」が三首という具合になる。もし、ここで△印のものも、ただ単にをみなへし花を詠んだものではないと考えるならば、半数以上がすでに、『万葉集』の中に「女」というイメージが生まれていると言えるだろう。これを裏付けてくれるものとして次のような、『万葉集』の「をみなへし」の表記がある^⑩。

佳人部偽 (2107) 美人部師 (2115) 娘子部四 (675)

このことから、すでに万葉時代に「をみなへし」を「をんな」(女)によそえていたことが分る。それも普通の女ではなく、「佳人」、「美人」によそえてあるわけである。また、『新撰字鏡』にも、「嬢(娘)」の字に、「婦人美也。美女也。良女也。肥大也。乎美奈」とあり、「をんな」が美女・佳人の意に用いられていたことが知られる。

では、次に、『古今和歌集』での例を見ることにする。

b. 古今和歌集

『古今和歌集』^⑪には「秋上」と「雑躰」にそれぞれ次のような歌が見られる。まず歌を紹介して、意味を考えてみたいと思う。

まず「秋上」の歌である。

(226) 名にめでておれる許ばかりぞをみなへし

我おちにきと人にかたるな

(227) をみなへしうしとみつぞ行きすぎる

おとこ山にしたてりとおもへば

(228) 秋ののにやどりはすべしをみなへし

名をむつまじみたひならなくに

(229) をみなへしおほかるのべにやどりせば

あやなくあだの名をやたちなん

(230) 女郎花秋のの風のうちなびき

心ひとつをたれによすらん

(231) 秋ならであふことかたきをみなへし

あまのかはらにおひぬものゆへ

(232) たが秋にあらぬものゆへをみなへし

なぞ色にいでてまだきうつろふ

(233) つまこふるしかぞなくなる女郎花

をのがすむの花としらずや

(234) をみなへし吹きすぎてくる秋風は

めにはみえねどかこそしるけれ

(235) 人のみることやくるしきをみなへし

秋ぎりにのみたちかくるらん

(236) ひとりのみながむるよりは女郎花

わがすむやどにうへてみましを

(237) をみなへしうしろめたくも見ゆる哉^{かな}

あれたるやどにひとりたてれば

(238) 花にあかでなにかへるらんをみなへし

おほかるのべにねなまし物を

以上の十三首である。『万葉集』のところでしたような印をつけるなら全部○印になる。つまり、「女のイメージを持つもの」といえる。この中でいちば

ん「をみな」(美女)のイメージが薄いと思われる(232)の歌も、「飽き」、「をみな」(美女)、「色に出で」「うつろふ」ということばはそれぞれ「をみなへし」とも「女性」とも連想できる語で、その二重映しの微妙さが効果をあげているといえる。

また、(226)の歌については、藤原顕昭著『古今集註』のように、「をみなへ(=エ)し」を「をみな—よし」と解しているのもある。従って、『古今和歌集』時代には、「をみなへし」はすっかり「をんな」のイメージが重なっていると書いていいだろうが、一角「女郎」のイメージもあった。それをはっきり感じさせてくれるのが、「雑躰」誹諧歌の中の次のような歌である。

(1016) 秋ののになまめきたてるをみなへし

あなかしかまし花もひと時

(1017) あきくればのべにたはるる女郎花

いづれの人かつまで見るべき

(1018) 秋きりのはれてくもればをみなへし

花のすがたぞ見えかくれたる

これらの歌では「をみなへし」を、「なまめき立てる」、「たはるる」と言っているなど、遊女の面影を添える言方となっている。

では、この「をみなへし」が『源氏物語』の中ではどうイメージされているのかを見ることにしよう。

B. 『源氏物語』の中で

『源氏物語』の中に「をみなへし」ということばは十五例出ている。それぞれの箇所をあげながらそのイメージについて考えてみたい。

まず「野分」巻の、野分があった翌朝、見舞いにかこつけた源氏の懸想に困惑する玉鬘の歌がある。

吹きみだる風のけしきに女郎花

しをれしぬべき心地こそすれ

([3] P.272)

この歌での、「吹きみだる風」は、みだらな行為に出る源氏を野分の風にた

とえ、「をみなへし」は玉鬘自身を示している。これもやはり「をんな」のイメージがある。

そして、これに対する源氏の返歌として、

した露になびかましかば女郎花

あらし風にはしをれざらまし (3 P.273)

とある。即ち、なよ竹のようにひそかに私（源氏）になびいておられたら、あなたもいまさら困ることもなかるうに、という歌である。この場合もやはり「をみなへし」は「をんな（玉鬘という目の前の具体的な例である）」のイメージを持っている。

また、「夕霧」の巻に次のような歌がある。落葉の宮宛の夕霧の懸想文に、母御息所が代って歌を送る

女郎花しをるる野辺をいづことて

ひと夜ばかりの宿をかりけむ (4 P.412)

この歌は、「秋の野にかりぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿もかきなむ」(古今六帖二、貫之)によると言われているように、「女郎花」は落葉の宮、そして「野辺」は小野の山里をたとえて、夕霧が訪れないことを語る歌である。当然これも「をんな」のイメージを持っている。

そして残りは全部第3部の「宇治十帖」の中に見られるが、まず「匂宮」の巻に、

……秋は世の人のめづる女郎花、小^き牡^{しか}鹿の妻にすめる萩の霧にもを
さをき御心移したまはず、老え忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、も
のげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れのころほびまで
思し棄てずなどわざとめきて、香にめづる思ひをなん立てて好まし
うおはしける…… (5 P.21~P.22)

と、香りによって物をめづる趣味をとくにだいたいしている匂宮（兵部卿宮）のことを言っている。「世の人のめづる女郎花」のところから、『古今和歌集』（秋上・遍照）の「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人に

かたるな」を引歌としてあげられているが、『湖月抄』には、「萩は匂ひなき花なれば匂宮の御心とめ給はぬ也」とあり、このすぐ後に菊、藤袴、吾亦紅の芳香のものに対して、香りのない女郎花、萩を対照させているともいわれる。しかし私は、この「秋は、世の人のめづる女郎花」を後の文に続けないで、まず見出し語といったことばとして促えたい。秋の季節感と情趣あふれる見出し語である。さもないと、先に挙げた『古今和歌集』(234)の歌、「をみなへし吹きすぎてくる秋風は、めにはみえねど、かこそしるけれ」があるし、また本居宣長著『古今集遠鏡』では、「テウド女ニ逢テキタ男ノ ウツリガノスルヤウデ」と補って解釈している。これについては実物をもって確めない限り何とも言えないが、もしここで女郎花を香りのないものとして目もくれなかったとすれば、後の「総角」の巻で、宇治の姫君を「をみなへし」にたとえているのはアイロニーである。

匂宮が薫にしきりに姫君への手引きを頼むが、その匂宮と薫のやりとりの場面である。

(匂宮) 女郎花さけるおほ野をふせぎつつ

心せばくやしめを結ふらむ

と戯れたまふ。

(薫) 「霧深きあしたの原の女郎花こころをよせて見る人ぞみるなべてやは」など、ねたましきこゆれば、「あなかしがまし」と、はてはては腹立ちたまひぬ。

(5 P. 250)

これもやはり、前に挙げた『古今和歌集』の(235)と(1016)の歌を引歌として指摘することが出来、「をみなへし」が持つ「をんな」のイメージは強い。

また次にあげる「宿木」の巻の例は、本研究の考えの発端にもなったものである。薫は、むなしく厭わしい人生を諦観しながらも、一方では匂宮の妻になった中の君への思いも大きくなり、つい一夜をあかして中の君の所へ向う場面である。

……………女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬ。 (㊦ P.381)

ここでの「をみなへし」は、同じ「宿木」の巻の中で、「……なげのすさびにもものも言ひふれ、け近く使ひ馴らしたまふ人々の中には、おのづから憎からず思さるるもありぬべけれど……」といった「け近く使ひ馴らしたまふ」女たちを言っているのです。どちらかというと、『古今和歌集』の中でも「雑躰」の歌(1016、1017、1018)のイメージにより近いと言えます。

また同じ「宿木」の巻に、匂宮が六の君に送った後朝の文に対する六の君の返歌がある。

女郎花しをれぞまさるあさ露の

いかにおきけるなごりなるらん (㊦ P.400)

この歌では、「女郎花」は六の君、そして「あさ露」は匂宮をさしている。それから「蜻蛉」の巻には次の三例がある。まず、明石の中宮の御殿に参上した薫が女房たちのところで詠んだ、

をみなへし乱るる野辺にまじるとも

つゆのあだ名をわれにかけめや (㊦ P.257)

という歌に、女房二人が詠んだ歌である。

花といへば名こそあだなれをみなへし

なべての露に乱れやはする (同)

旅寝してなほこころみよをみなへし

さかりの色にうつりうつらず (同)

この三首とも「をみなへし」のことばに、露骨な女のイメージを与えている。

そして後は全部「手習」の巻の中であるが、まず、浮舟がいる山荘に妹尼の婿中將が訪れるところである。

……これもいと心細き住まひのつれづれなれど、住みつきたる人々は、ものきよげにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花桔梗など咲きはじめたるに、いろいろの狩衣姿の男ど

もの若きあまたして……

(〔6〕 P.293)

ここでは、若い男女の交渉を描くための背景を設定するために、秋の七草があげられているといえよう。そして、ここで桔梗を「あさがほ」としないことにも注目したい。この時代の「あさがほ」はもうすでに桔梗でない別の花になっていたことを思わせるとともに、これから若い男女の交渉の背景として「あさがほ」は、ここの雰囲気に合わないことばになっていたせいかも知れない。「あさがほ」のことについてはまた後でいうことにして、先へ進むことにする。

次は、尼君の昔の婿の中将が去りぎわに、

……前近き女郎花を折りて、「何にほふらん」と口ずさびて独りごち
立てり。

(〔6〕 P.297)

とあるのは、「ここにしも何にほふらん女郎花人の物いひさがにくき世に」(拾遺・雑歌・遍照)の上句を借りて、こうした僧庵に不似合いな女がいることを怪しみながら、いかにも恋愛的な情趣の場面であることを、「女郎花」の一語によって暗示しているのである。

そしてついに、横川からの帰途中中将が浮舟に歌を送る。

あだし野の風になびくなをみなへし

われしめ結はん道とほくとも (同、P.301)

庭前の女郎花に浮舟をたとえて、「しめ結はん」と、所有したい気持をありありと表わして求婚するが、これを強く拒む浮舟に代って尼君が返歌を詠む。

うつし植ゑて思ひみだれぬをみなへし

うき世をそむく草の庵に (同、P.301)

こどもやはり「をみなへし」に美しい人、即ち、浮舟をたとえて詠んでいる。

以上、「をみなへし」のことばについて、『万葉集』と『古今和歌集』そして『源氏物語』の中の例をあげて、そのイメージを探ってみた。その結果、「をみなへし」はすでに『万葉集』の時代から「をんな」「美人」「佳人」のイ

メージを持って盛んにうたわれており、「をみなへし」を「をんな」にたとえて詠むのは一般的なことであった。そして『源氏物語』の中でも例外ではなく、従来のイメージを受けつぐ形で使われていることが分かる。

(4) あさがほ

では今度は「あさがほ」について考えてみよう。

「あさがほ」の花はどんな花であるかについてはいろいろと諸説があるので、まず、それぞれの作品の中で詠まれた「あさがほ」は、桔梗、木槿、牽牛子、旋花の内どれに当るかを考え、それから受けるイメージというものを追ってみたいと思う。

A. 『源氏物語』以前の作品の中から

『源氏物語』以前の作品の中から見る時、まず気がつくのは、「あさがほ」が詠まれた例が少ないことである。そして何よりも『古今和歌集』に「あさがほ」の歌が一例も見えないことは注目すべきであろう。『古今和歌集』だけでなく、他のどんな勅撰集にもその例は見えない。次にその数少ない例を紹介しよう。

a. 万葉集

『万葉集』の中には五首入っている。

まずは五首の歌を紹介し、それぞれの「あさがほ」がどんな花であるかを考え、更にそのイメージを考えていきたい。

(1538) 秋の花尾花葛花鬘麥の花

女郎花また藤袴朝貌の花(山上臣憶良の秋の

野の花を詠む二首 其の二)

この歌の内容からはまだ具体的な花の像は目に浮ばない。ただ、秋の花というので、夏花が咲く旋花や牽牛子は除外されよう。そして「秋の野に咲く花」とは、古来から日本にあった野生の花であることを物語っており、外来品種である木槿が除外されることになろう。となると、ここでは『万葉集大

成』をはじめ、万葉時代の「あさがほ」を桔梗とする従来の説に従っていいだろう。

(2104) 朝顔は朝露負ひて咲くといへど

夕影にこそ咲きまさりけれ

この歌については、『箋注倭名類聚抄』の中で、「あさがほ」は本来、朝咲く花でなく、旋花をさすとし、この歌がその証拠であると言っている。しかし、完訳日本の古典『万葉集 三』の脚注では、また昼間も咲き続ける在来種のアサガホ（牽牛子）があり、それを詠んだものである、としており、判断ははなはだ難しい。

(2274) 展^{こいまろ}轉び戀ひは死ぬともいちしろく

色には出でじ朝貌の花

この歌からは、「あさがほ」の花が濃い色をしていることが分るが、桔梗説に従えば何の不都合もない。

(2275) 言に出でて言はばゆゆしみ朝顔の

ほには咲き出^てぬ恋もするかも

この歌も(2274)の歌と同じく、目だつ濃い色を言っていると思われるところから、やはり桔梗とする。

(3502) わが目^{めづま}妻人は離くれど朝貌の

年さへごとと吾は離かるがへ

この歌は「離^さく」を「柵」にかけ、また「朝貌の」は枕詞としてサクにかかっている。

以上、五首の歌の例をあげてみたが、『万葉集』の「あさがほ」は、色の濃い秋の野花として、柵にかかる程度の高さをしている花、即ち、桔梗の花を詠んだとみていいだろう。

b. 古今和歌集

ここで、「あさがほ」のことばはないが、念のため「けにごし」の歌をあげておくことにする。

(444) うちつけにこしとや花の色を見む

をく白露のそむるばかりを

この歌は『古今和歌集』の「物名」に載っている歌で、牽牛子のことを「げに濃し」と、その花の色の濃いことを言っている。しかし、この歌が「秋上下」とも入っていないで、「物名」のところにるのは、「げにこし」ということばが『古今和歌集』の時代に珍しい物名であったことを示しており、かつ、『万葉集』時代には牽牛子に和名がなかったという説を裏付けてくれる。そして、前にも述べたように、一つ看過してはならないことは、『古今和歌集』の中に「あさがほ」は歌の素材としては一例も使われていないことである。

c. 古今和歌六帖^⑩ (古今六帖)

作歌の手引書として多くの古歌を収めた類題和歌集であり、またその各題の連想的な掲げ方が『枕草子』の素材の並べ方に関連性があるといわれる『古今和歌六帖』の中に、「あさがほ」は全部で六首その例がある。しかし、その中の四首が『万葉集』の歌であり、新しいのは二首だけである。

(1322) 山がつかきほにさけるあさがほは

しのめならでみるよしもなし

(3895) おぼつかなたれとかしらん秋霧の

絶間にみゆるあさがほのはな

この二首のうち、特に(1322)の歌は、その上句が『古今和歌集』の(695)の「あなこひし今も見てしか山がつかきほにさける山となでしこ」の歌の下句とそっくりで、ただ「あさがほ」と「山となでしこ」とが違っている。それは「山となでしこ」も「あさがほ」も、山がつかきほによく見かける花であったことを思わせてくれるが、とにかく『古今和歌六帖』の中の歌二首は、「あさがほ」の花が極く短いあいだだけ咲いていることを言っている。

d. 伊勢物語

『伊勢物語』^⑪三十七話に次のような例がある。

昔、おとこ、色好みなりける女に逢へりけり。うしろめたくや思(ひ)けん、

我ならで下紐したひもとくなあさがほの夕影またぬ花にはありとも

返し、

二人してむすびし紐ひもをひとりしてあひ見るまでは解かじとぞ思(ふ)

ここでは、夕べを待たないうつろいやすいものとして「あさがほ」のことが言われている。

e. 大和物語

また、『大和物語』^⑩の第三十九段を見ると、

伊勢の守かみもろみちのむすめを正明ただあきらの中將の君にあはせたりける時に、
そくなりけるうなひを右京かみの大夫よびいでてかたらひて、あしたによみ(宗干)
ておこせたりける、

しら露の置くを待つ間のあさがほみずぞなかなかあるべかりける
(右京大夫)

ここはやはり、白露が置いて消えるほんのつかの間の「あさがほ」という意味になろう。そして「白露」を男、「あさがほ」を女、「置く」は逢ったことを指し、「見る」には契りを交わす意がある、と考えるならば、この歌は短かかった逢う瀬を惜しむ内容になる。

f. 枕草子

また『枕草子』^⑪の六十五話にも次のような例が見える。

里あふさかは逢坂の里。ながめの里。いざめの里。人づまの里。たのめの里。夕日の里。つまとりの里、人に取られたるにやあらん、我がまうけたるにやあらむとをかし。伏見の里。あさがほの里。

ここはそれぞれの面白い里の名を並べたものと見え、前にく(2)「あさがほ」と「をみなへし」で引用した『紫式部日記』の中の「朝顔」と同じく、「朝起きた時の顔」の意として捉えられる。これは毛詩の、顔が木槿花に似たとする「薺」からの言い習わしなのかも知れない。

以上が、『源氏物語』以前の作品の中に見える「あさがほ」のことばの例で

ある。

では、今度は『源氏物語』の中での例を見ることにしよう。

B. 『源氏物語』の中で

『源氏物語』の中に「あさがほ」のことは十一例出て来る。まず「帚木」の巻の中で、源氏が方違えした紀伊守の宅で、侍女たちが源氏の噂話をして
いるのを耳にする場面である。

……式部卿宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頬ゆが
めて語るも聞こゆ。 (I P.171)

式部卿宮の姫君とは後に「朝顔の姫」と呼ばれる人で、ここで急にこの噂話
が語られ、物語の流れからは唐突な感じを与えているところでもある。と
にかく、ここでは、「朝顔の姫君」との交わりを推測させ、またこれからの展
開を予想させている。

そして「夕顔」の巻の中に、秋、源氏が六条御息所を訪れたその翌朝、見
送りに出た御息所の侍女、中將のおもとを朝顔にたとえて歌を詠む場面があ
る。

……廊の方へおはするに、中將の君、御供に参る。紫苑色のをりに
あひたる羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかになまめ
きたり。

(中略)

「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝
顔いかがすべき」…… (I P.221～P.222)

とあるが、中將のおもとの姿がまさしく紫苑色の朝顔の花のようであることを
言っている。ここで、紫苑色のことから、桔梗の花と牽牛子（現在のあさ
がほ）が思い浮べることができが、まだはっきり断言はできない。また人
の容貌が朝顔に似ているというので、例の木槿花の「薺」のことも考えられ
るが、すぐ後に続くところに、次のようなことが書いてある。

……をかしげなる侍童の姿好ましよう、ことさらめきたる指貫の裾

露けげに、花の中にまじりて、朝顔折りてまゐるほどなど、絵に描かまほしげなり。
(同、P.222)

つまり、小姓は朝顔を折りに花の所に入って行ったため指貫の裾を露に濡らしてしまったのである。木槿花のように丈の高い花ではなく、他の秋の花とまぎって咲くような低いものになるので、桔梗か牽牛子かである。

また「賢木」の巻に、雲林院に詣でた源氏が朝顔の斉院と消息を交わし、美しい成長ぶりを偲ぶ場面があるが、前の「帚木」の巻での例とからんで次のようになっている。

……まして朝顔もねびまさりたまへらむかしと、思ほゆるもただならず、恐ろしや。
(② P.112)

ここは表面的には花に関しては別に問題はないようであるが、しかし、斉院のことを朝顔としている点は注意すべきであると思う。つまり、斉院の容貌にちなんだ言い方であったのか、それとも、朝霧の晴れ間も待たない朝顔の本質的なことについて言っているのかが問題になるのである。これは物語の中の朝顔の斉院の人物像にもつながる問題かも知れない。しかし、そのことについては後にまわすことにする。

次は「朝顔」の巻であるが、巻名の由来になっている部分をあげようと思う。

……枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あ
るかなきかに咲きて、にほひもことに変れるを折らせたまひて奉れ
たまふ。

(中略)

見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらん

(中略)

秋はてて霧のまがきにむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔
「似つかはしき御よそへにつけても露けく」とのみあるは……

(② P.466)

父宮の服喪で齊院を退いた朝顔の君を、源氏が訪ねて求愛するが、姫君の心強い態度に源氏はゆううつを覚え、翌朝、朝顔の花に添えて文を送る場面である。

この中にいくつか注意を払いたいことばがある。①「這ひまつはれて」、「まがきにむすぼほれ」、②「あるかなきかに咲きて」、「あるかなきかにうつる」がそれである。つまり、いままでの「朝顔」には見られなかった、「巻きつく」とか「(垣根)にまつわりつく」ということばは、「朝顔」の花が蔓草の一種であることを思わせる。また、②の「あるかなきか」ということばは、いかにも弱々しさを表現していると思われるが、例えば、『万葉集』中の(2274)や(2275)の歌では、「花の色が濃いことからすぐ目立つ」と言っており、両者は大きな対照をなしているといえる。

日本古典文学全集『源氏物語』では、この部分になってはじめて「朝顔」についての頭注をつけ、「朝顔」の花は現在の朝顔と見てよい、としている。

もう一つ、ここで看過出来ないことがある。それは、先にあげた源氏の歌にある、「朝顔」の花のさかりは過ぎやしぬらん」ということばに対して、「あるかなきかにうつる朝顔」が、いかにも朝顔の姫君自身に似つかわしいたとえであると、自ら認めていることである。

そこで、少し朝顔の姫君と「朝顔」の巻のことについて述べておきたい。

「朝顔」の巻は、従来プロットの上では物語の進展に寄与しない巻といわれ、この巻の女主人公、朝顔の姫君の物語への登場と退場がいつしよにあるため、成立と構想論において様々に論じられて来た。阿部秋生¹⁶氏もこの巻について、

「霧壺」巻から「藤裏葉」の巻までのいわゆる第1部を違った二系列の物語としてとらえる時、この「朝顔」の巻だけは、構想の上から、また全体の配列の上からみて、何れかといえば「桐壺系」に加えられるだろうが、やはり異色ある一帖だ。

と言っておられ、また池田亀鑑氏も『新講源氏物語』の中で、「『朝顔』の巻は

構想的には『薄雲』の巻の中に位置してよい巻である」と言っておられるとともに、また、「別に書き添へたものであらうと考えたい」、とも言っておられる。

朝顔の姫君は光源氏の求愛を避けつづけ、生涯未婚を通すことによって源氏との交流をささえた女性であった。つまり、源氏に自分の朝方の顔を見せることなどは絶対にせず、まさに「あさがほ」の花そのものを思い出させるところがあるのだ。しかも、その「あさがほ」とは、誰もがすぐ、その美しさに目をひかれる桔梗のような花ではなく、いかにも弱々しく、清楚な美しさで控え目なイメージのある現在のあさがほのような花を指している。

では、またもとに戻って、「野分」の巻の中の例を見ることにする。野分の翌朝、源氏が夕霧と六条の院の婦人達を見舞うが、その中の明石の上の住居のさまである。

わらは
童^{わらは}など、をか^{あこめすがた}しき^{あこめすがた}袷^{あこめすがた}姿うちとけて、心とどめとりわき植^{あこめすがた}ゑたま
りんだう
ふ龍胆朝顔の這^{あこめすがた}ひまじれる^{あこめすがた}籬^{あこめすがた}も、みな散り乱れたるを、とかくひき
出で尋ぬるなるべし (3 P.269)

ここも「這ひまじれる籬も」というところから「朝顔」は現在のあさがほ(牽牛子)であると思われる。

次は「宿木」の巻での例である。

……霧の籬^{まがき}より、花の色々おもしろく見えわたる中に、朝顔のはかなげにてまじりたるを、なほことに目とまる心地したまふ。「明くる間咲きて」とか、常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし。

(中略)

「さばれ、かの対の御方の悩みたまふなるとぶらひきこえむ。今日は内裏に参るべき日なれば、日たけぬさきに」とのたまひて、御装束^{きょうぞく}したまふ。出でたまふまに、^お下りて花の中にまじりたまへるさま……

(中略)

朝顔をひき寄せたまへる、露いたくこぼる

「けさのまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る
はかな」と独りごちて、折りて持たまへり。

(中略)

折りたまへる花を扇にうち置きて見ろたまへるに、やうやう赤み
もて行くもなかなか色のあはひをかしく見ゆれば、やをらさし入れ
て、

よそへてぞ見るべかりけるしら露のちぎりかおきしあさがほの花
ことさらびてしももてなぬに、露を落さで持たまへりけるよ、と
をかしく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

「消えぬまにかれぬる花のはかなさにおくる露はなほぞまされ
る何にかかれる」と、いと忍びて、言もつづかず。

(㊦ P.379～P.384)

薫が大君や中の君にたいする慕情と世の無常を思う気持から眠れぬ夜を明
かした翌朝、薫の目にうつった庭のさま、そしてつい中の君を訪ねる決心を
し、庭の朝顔を手折ることで実際の行動に移る薫の心境とぴったり合致して
いるようなまわりの情景、そして実際薫と中の君が会って歌のやりとりが行
なわれる。中の君もまた、姉君のことを思い、今の自分の境遇から世のはか
なさを詠んで返歌する。

ここの部分は宇治十帖物語の構想上、非常に興味深いところである。即ち、
今までの大君物語から浮舟物語への展開の重要なきっかけになるところと思
われるからである。

つまり、前篇での主人公の源氏とは違って、出生の秘密を抱きながら、常
に世の無常を感じていた薫にとって、大君への恋は精神的な救い道でもあつ
た。だが、その愛は、花を咲かせることをまたずしてはかなく散った彼女の
人生とともに、しぼんでしまったのである。

しかし、ここで再び薫の心は大きく戦慄し、はかないと知りながら、否、

はかないからこそ、思い捨てることの出来ない、薫にとっては深い因果とでも言わざるを得ないようなものを感じるのである。中の君の所へと、花を折って実際に足を運ぶ時、「露いたくこぼゆ」という場面は、その瞬間の薫の高揚と緊張を感じさせ、よく効いた表現といえよう。

しかし、ここで中の君との恋が成立するわけではない。物語は新たな浮舟物語へと展開していく。そして、その浮舟物語こそはかない恋物語の頂点といえよう。

結び

以上、「あさがほ」と呼ばれる花の推移と、それにとまなうイメージの変化というものを考えてみた。そして「をみなへし」と「あさがほ」という二つのことばに関して、『源氏物語』とその以前の作品の中でのイメージをも探ってみた。ここで、本稿末尾の表2と表3を見て頂きたい。御覧のように、『源氏物語』の中の「をみなへし」のことばは、従来の歌語としてのイメージを継いでいるが、「あさがほ」の場合は、花だけでなく、イメージまでも変化していることが分る。そして「あさがほ」のことばは、時には「をみなへし」とみごとな対照を見せながら、深い奥行きを持つ強いイメージのことばになっている。

つまり、「あさがほ」の花は、『源氏物語』以前の作品の中では、桔梗説が有力であったのが、『源氏物語』の中では現在のあさがほに変わっていることと共に、「はかなさ、世の無常」を代弁してくれる存在となっている。それは「朝顔」の巻から次第にその印象を強め、主人公たちの容貌や人柄はもちろん、第3部の宇治十帖物語に至っては、恋物語の行方を思わせる重要なキーワードとなっている。決して実ることのない第3部の恋物語は、源氏を主人公とする恋物語とはまた違う色を持つものとして、「あわれな美」の形で定着していくが、それは『源氏物語』以降の作品として、多くの私撰集の中にこの「あさがほ」を詠んだ歌がよくみられるのをみても分ることが出来る。

自分で濃い色を持ちながら、なかなか満開の時の姿を人に見せてくれない朝顔の花。静やかでか弱く感じられる朝顔のしぼんだ姿を見た時、そんなに早くしをれてしまった朝顔が可憐でならない。その「あはれの情緒」を紫式部はみごとに書きあげている。

ここに「もののあはれ」の文学の『源氏物語』の一面をかいまみる事が出来よう。

注

- (1) 『源氏物語引歌索引』、伊井春樹著（笠間書院）
- (2) 『『源氏物語』を読む』——『源氏物語』の言語と表現——秋山虔・池田弥三郎・清水好子（筑摩書房）
- (3) 『源氏物語必携II』——歌語——鈴木一雄（学燈社 1982）
- (4) 『源氏物語論集』石田穰二（桜楓社・昭46）
- (5) 同 上
- (6) 「萬葉集大成」8. 民俗篇（平凡社・昭61）
- (7) 「日本古典文学全集」阿部秋生・秋山虔・今井源衛（小学館・昭58）以下『源氏物語』本文の引用はこれによる。
- (8) 「完訳日本の古典」24. 『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記』（小学館・昭59）
- (9) 「日本古典文学大系」『萬葉集』（岩波書店・1987）以下『萬葉集』の引用はこれによる。
- (10) 『新釈古今和歌集』にその表記が見える。
- (11) 「日本古典文学大系」『古今和歌集』（岩波書店、1987）以下『古今和歌集』の引用はこれによる。
- (12) 「新編国歌大観」第二巻 私撰集編『古今和歌六帖』（角川書店・昭61）
- (13) 「日本古典文学大系」『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（岩波書店・1986）
- (14) 同 上
- (15) 「日本古典文学大系」『枕草子・紫式部日記』（岩波書店・1987）
- (16) 『源氏物語研究序説』下巻

『源氏物語』の中の「をみなへし」
[表2]

	例	対象	イメージ
野分	2	玉鬘	女
夕霧	1	落葉の宮	女
匂宮	1		
総角	2	宇治の姫君	女
宿木	2	まわりの女 六の君	女
蜻蛉	3	女房たち	女
手習	4	浮舟	女

[表3] 「あさがほ」の花とそのイメージ

		花	根 拠	イ メ ージ	
万葉集		桔梗		秋の七草の一つとして 濃い花色	
古今六帖			秋霧の絶間に見ゆる…	花はちょっとした短い 間しか咲かない	
伊勢物語			夕影待たぬ花	変りやすい	
大和物語			しら露のをくをまつま のあさがほはみずぞ…	花が咲く時間の短さ	
枕草子			…朝貌の里	朝起きた顔	
源 氏 物 語	帚木	1			
	夕顔	2	桔梗・あさがほ 両方考えられる	…指貫の裾露げに花 の中にまじりて…	
	賢木	1			
	朝顔	3	*あさがほ	「這ひまつはれて」 「あるかなきかにうつ る」など	はかない
	野分	1	*あさがほ	這ひまじれる籬…	
	宿木	3	*あさがほ		はかない

(*現在のあさがほを意味する)

討議要旨

小沢正夫氏より、「万葉集」の中の「をみなへし」に、女性のイメージがでているのは「女」という言葉が入っているからで、素朴な洒落のようなものから始まったのではないか、とのコメントがあった。さらに、語源の問題を視野に入れると、もう一歩進んだ展開になろう、とのアドバイスがなされた。